

Title	東晋時代の史書における阮籍評価の相違
Sub Title	The antagonism viewed in historical books in Dongjin on Ruan Ji's personal valuation
Author	阿部, 順子(Abe, Junko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1995
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.68, (1995. 5) ,p.44- 60
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00680001-0044

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東晋時代の史書における阮籍評価の相違

阿部順子

はじめに

阮籍の伝記のうちで、一応完全な形で現在に残っているその最初のもものは、陳壽『三國志』卷二十一魏書王粲伝における記述である。

(阮) 瑀子籍、才藻艷逸、而倜儻放蕩、行己寡欲、以莊周爲模則。官至步兵校尉。

全文僅か二十八字にすぎず、その大きな知名度に比べると、意外な感を抱かせるほど短い。よって裴松之の注には東晋の孫盛『魏氏春秋』が引かれ、その大まかな生涯が分かるようになっていた。完存する次の伝記は、唐初に編纂された太宗奉勅撰の『晋書』卷四十九における本伝である。こちらは『三國志』とはちがい、独立した個人の伝の形をとり、数百倍の字数が費やされ、内容も『世説新語』などでおなじみの逸話がいくつも載っている。

『三國志』と『晋書』とはおよそ四百年の間隔がある。『晋書』における阮籍伝の規模の増大は、阮籍がこの間により

著名になったことを示すであろう。つまり阮籍の没後二十数年という時点では、陳壽はこの人物にさほどの重要性を見出だし得なかつたのではないか。しかし、『晉書』が編纂された頃には、阮籍に関して依拠すべき記録が多く存在し、阮籍がないがしろにできない歴史上の重要人物になっていたことがわかる。この両書のちがいを考えるとき、東晋時代(三一七―四二〇)における阮籍の存在がどうであつたかについては注意を要する。

というのは、ちょうど東晋半ばから劉宋半ばに生きた裴松之が、『三國志』注に引用した孫盛『魏氏春秋』もその一つに加えてよいが、東晋においては実に多くの晋史が編纂されて⁽¹⁾いる。これらの晋史は、『三國志』裴注はもちろん、『世説新語』劉孝標注などに頻繁に引用されていて、普段よく目にするものである。唐初編纂の『晉書』一百三十卷は、先行する晋史十八家はいずれも最善ではないため、史官に勅して更に纂録を加えさせ⁽²⁾、特に齊の藏榮緒の『晉書』を本とし、諸家の晋史や晋代の文集を拾い集めたといふものであつた。⁽³⁾ 實際唐の『晉書』と、藏榮緒『晉書』の佚文とを比べれば同じことが多いが、その藏榮緒『晉書』にしたところで、結局以前の晋史をもとにして作られたにはちがいないのである。また、唐の『晉書』にもよく引かれて⁽⁴⁾いる『世説新語』も、その種本として、東晋時代の晋史が用いられたと思われる例が多い。つまり、東晋時代に成立した晋史には、『世説新語』や唐初編纂の『晉書』でおなじみの阮籍伝説の原型ともいふべき記事が詰まっていたのである。よつて、『三國志』以後、阮籍伝説は東晋時代にはほぼ出揃つたといつてもよく、西晋から東晋にいたる阮籍伝説形成の過程は、大部分これらの晋史によつて知ることができると思われる。

阮籍に関する逸話のほとんどは、やはり他人の常識を越えた理解しがたい行動、たとえば服喪中の札を無視した振る舞いとか、飲酒泥酔して正気ではないとか、車で先に進めないと慟哭したとかいったことである。これはいわゆる放縱、放縱、任放、任達、任誕などと呼ばれる行動様式であつて、当時は阮籍といへば、まず放縱という印象が絶対的であつ

たことが窺われる。そして、この放縱の人阮籍に對して、東晋の史家たちの解釈と評価は是と否の二つに分かれた。

本稿は、東晋に成立した諸家の晋史における阮籍に関する記述の違いから、阮籍の死後ほどない（といつても五十年は経っている）東晋において、その人間性をめぐって、当時の人々が阮籍理解にとつた様々な態度を考えていこうとするものである。が、唐初の『晋書』以前の晋史は、全部散佚して完本はまったく残っていない。よつて当然、諸書に引用された佚文を頼りにするほかはないことをお断わりしておく。

一 阮籍と何曾

阮籍がその生前、放縱な行為を理由にしばしば弾劾されていたことはよく知られている。そのもとづくところの一つは、嵇康の『與山巨源絶交書』（『文選』卷四十三書下所収）における阮籍描写である。

阮嗣宗口不論人過、吾每師之而未能及、至性過人、與物無傷、唯飲酒過差耳。至爲禮法之士所繩、疾之如讎。幸頼大將軍保持之耳。

この記述は同時代人による貴重な証言ともいふべきもので、阮籍が当時「礼法の士」なる人々の攻撃にさらされ、大將軍こと司馬昭の庇護を受けていたことの有力な証拠となる。

こゝうした状況を示す逸話として有名なのは、『世説新語』任誕篇に載る次の話であろう。

阮籍遭母喪、在晉文王坐、進酒肉。司隸何曾亦在坐、曰、明公方以孝治天下、而阮籍以重喪顯於公坐飲酒食肉。宜流之海外以正風教。文王曰、嗣宗毀頓如此、君不能共憂之何謂。且有疾而飲酒食肉、固喪禮也。籍飲噉不輟、神色自若。

これはまったく先の『絶交書』にある嵇康の言葉どおりの状況を描出している。何曾との確執（阮籍は相手にしなかったらしいが）は、東晋時代においても有名な話だったらしく、数家の晋史に同様の話が記載されていた。が、同じ内容の話でも、阮籍に味方するか何曾に味方するかで記述が違ってくる。『世説新語』に出てくる阮籍は大概好意的に書かれていて、先の任誕篇の本文でも、結局は阮籍の超俗を称えたいのである。しかし、東晋時代の晋史のなかには、阮籍に対し明らかに否定的な観点から、この逸話を記録しているものがある。

A 何曾嘗謂阮籍曰、卿恣情任性、敗俗之人也。今忠賢執政、綜核名實、若卿之徒、何可長也。復言之於太祖。籍飲噉不輟。故魏晉之間、有被髮夷傲之事、背死忘生之人、反謂行禮者、籍爲之也。

〔『世説新語』任誕篇注所引干寶「晉紀」〕

B 阮籍負才放誕、居喪無禮。何曾因言於帝曰、公方以孝治天下。而聽阮籍以重哀飲酒食肉於公座。宜擯四裔、無令汚染華夏。帝曰、此子羸病若此。君不能爲吾忍耶。曾重引據、辭理甚切。帝雖不從、時人敬憚之。

〔『北堂書鈔』卷六十一所引王隱「晉書」〕

Aの干寶「晉紀」の文では、「被髮夷傲」「背死忘生」という放縱の風潮が、却って（真の）礼とせられた原因は、阮籍の行動にあると断定している。またBの王隱「晉書」では、何曾の諫言のすばらしいことを述べ、「時人敬憚之」などといっているところを見ると、これは明らかに阮籍を難じた何曾の方に肩入れしているようである。ここで、今度は阮籍に肯定的な描写をしている晋史を挙げる。

C 籍性至孝、居喪、雖不率常禮、而毀幾減性。然爲文俗之士何曾等深所讎疾。大將軍司馬昭愛其通偉而不加害也。〔『世説新語』任誕篇注所引孫盛「魏氏春秋」、又見「三國志」卷二十一王粲伝注〕

D 何曾於太祖坐謂阮籍曰、卿任性放蕩、敗禮傷教。若不革變、王憲豈得相容。謂太祖宜投之四裔以紮王道。太祖曰、此賢素羸病、君當恕之。

〔「文選」卷四十二「與山巨源絕交書」注所引孫盛「晉陽秋」〕

C、Dの姿勢は先の任誕篇の本文とまったく同じであり、王隱「晉書」とは完璧に逆の視点で描かれていることがわかる。おそらくは、阮籍が何曾らから攻撃を受けていたという話自体は、風聞としてであれ、書物の形としてであれ、東晋に伝わっていたにちがいない。しかし、この話を史書に記載するにあたって、それぞれの史家の阮籍評価の違いによって、書き方が二つに分かれたのである。生前ばかりか東晋に至っても、以前として阮籍を嫌いな人々はいたのである。この阮籍をめぐる二つの評価の対立を、他の晋史の記事を通してもうすこしみてみよう。

二 反対論

先の干寶「晋紀」の文は、あれだけでは果たして阮籍非難の主張を強くうちだしているかどうかは判然としない。が、筆者がこれを阮籍反対論としてみたのは干寶「晋紀」の次のような文が残っているためである。

故觀阮籍之行、而覺禮教崩弛之所由、察庾純賈充之事、而見師尹之多僻、考平吳之功、而知將帥之不讓、思郭欽之謀、而悟戎之有費、覽傅玄劉毅之言、而得百官之邪、核傅咸之奏錢神之論、而覩寵賂之彰。

〔「文選」卷四十九史論上篇所収「晋紀總論」〕

今ほんの一部を抜き出したにすぎないが、この「晋紀總論」は、「文選」に全文が収録されており、かなり長い論文であ

る。内容は、西晋が五十余年で滅んだ理由について、各々の問題点を指摘して論じているものである。右に挙げた文は、西晋滅亡の原因の一つとして、現在の我々が魏晋的とみる諸風俗を退廃ととらえ、その様相を次々と羅列した後に出てくる。つまり、西晋に風教が壊乱を極めたその端緒は、阮籍の行動にあるという論旨である。ここで干寶は、阮籍を「禮教崩弛」の元凶と目しており、よって『晉紀』も阮籍をそのような人物として描いたはずであるから、孫盛「魏氏春秋」や『晉陽秋』、『世說新語』任誕篇のように、阮籍を至孝の人物とはみなさないであろう。

干寶『晉紀』については、阮籍に対する評価がはつきり出ている佚文が、残念ながら他に残っていないため、干寶が阮籍をそれほどまでに否定的にみていたかどうかはわからない。が、少なくとも『晉紀』の上では、阮籍を魏晋間の退廃した風俗の、即ち礼教を崩壊させた先駆者であると位置付けたのにはちがいない。

一方王隱『晉書』の方は、王隱が阮籍に対して悪感情を抱いていたであろうことを証するに困らない文が残っている。魏末、阮籍有才、而嗜酒荒放、露頭散髮、裸袒箕踞、作二千石、不治官事、日與鈴（伶の誤りか）下共飲酒歌呼。時人或以籍生在魏之交、欲伴狂避時、不知籍本性自然也。

（『太平御覽』卷四百九十八所引王隱『晉書』）

魏末、阮籍嗜酒荒放、露頭散髮、裸袒箕踞。其後貴游子弟阮瞻・王澄・謝鯤・胡母輔之之徒、皆祖述於籍、謂得大道之本。故去巾幘、脱衣服、露醜惡、同禽獸。甚者名之爲通、次者名之爲達也。

（『世說新語』德行篇注及『文選』卷四十九干寶『晉紀總論』注所引王隱『晉書』）

先の何曾の話やこれらの文をみるかぎり、王隱『晉書』の記事は干寶に比べて幾分感情的な嫌悪が濃く滲み出ているよ

うである。特に『世説新語』德行篇注に引く文の中では、阮籍の行動を真似した阮瞻や王澄をはじめとする西晋の放達派士大夫たちまでが「同禽獸」と罵られている。王隱が嫌いなのは阮籍一人ばかりでなく、放縦な行動をするという意味で阮籍につながる西晋名士もみな嫌いだつたのである。このことについては後にも述べる。

干寶、王隱と挙げたが、この他にも阮籍否定者と目される史家はいる。『晉書』四十四巻を書いた虞預という人物もそうだつたらしい。具体的な記事は残っていないが、唐初の『晉書』巻八十二の虞預伝にこのようなくだりがある。

預雅好經史、憎疾玄虛。其論阮籍裸袒、比之伊川被髮、所以胡虜遍於中國、以爲過衰周之時。

虞預はかつて論の形で阮籍非難を展開していたようである。こうした見方は、先に引いた干寶『晉紀總論』の論旨と同様であつて、西晋滅亡原因の一つである風俗の壞乱について、阮籍の行動にその端を求めたものである。こうしてみると、阮籍に対して否定的な見解を有している史家の言ひ分は、阮籍の礼に背いた放縦な行動が、晋の中原喪失とそれともなう西晋朝廷の滅亡とを招いたということだつた。

したがつて、阮籍に反対する史家が問題としたのは、様々な逸話の形で伝わっていたと思われる、阮籍の奔放で型破りな行動のみに絞られるであろう。現在の阮籍理解の常識とはちがひ、ここには当時阮籍が背負ひこんでいた政治的・個人的事情といつたことはいささかも考慮されていない。ただ阮籍の無礼な振る舞ひが、現実に及ぼした悪影響を非難するにとどまつている。

阮籍を面と向かつて難詰したという何曾は、実際にどのような理屈で阮籍をやり込めようとしたかは知るべくもない。嵇康は『絶交書』の中では、ただ酒を飲んで失敗をしてしまふばかりに礼法の士に憎まれることになつたと述べているだけで、阮籍がどんな不祥事を犯したのかは書いていないのである。ただ、礼に外れた（というよりは不謹慎な）態度

や行動を、人の道に背くもので、更には文化風俗を損なうとした干寶らの非難と、そう大差はなかったと考えてよいであろう。東晋においては、西晋の滅亡という衝撃的現実を實際に目睹した後だっただけに、何曾の非難が最強かつ最悪の実例と証拠とを伴う結果となり、放縱の気風に対する個人的嫌悪とも重なって、更に非難の根柢が強固なものとなったのである。

ところが、一方では、阮籍の当時置かれていた政治的状況と、阮籍の精神内部とに理解を示しつつ叙述する晋史があらわれた。

三 同情論

阮籍反対派が阮籍の常軌を逸した行為を、礼教を破壊したものととして責めたとすれば、阮籍に同情したり慕ったりした人々は、阮籍の理解しがたい振る舞いには何か裏があると考えた。つまり、阮籍の行動にはやむべからざる事情があったとか、無礼にみえても却って切実な真理が込められているとかいう解釈である。

こうした視点は唐初の『晉書』阮籍伝でも採用されているし、『世説新語』にも「阮籍胸中壘塊、故須酒澆之。」（任誕篇）という話が収められている。が、阮籍の個人的事情に理解と同情を示す見方は、東晋時代の晋史に既に存在した。一で挙げたCとD、何曾の阮籍告発に關した孫盛『魏氏春秋』と『晉陽秋』の記事をもう一度みてみると、阮籍が（服喪の）最中に札に外れた行動を取ったという非難の正当性を意識しているのか、これは「至孝」のなせるわざであって、その証拠に生命を損なうばかりに瘦せ衰えたのだという弁明を匂わせる表現となっている。喪において、自身が健康を害するほど過剰に悲しんではならないと札にあっても、悲しみのあまり「性を滅」したとか、または實際死んでしまっ

たとかいう話は、後漢から魏晉にかけて特に多いが、これらは大抵美談として語られたし、まして非難の対象になどならないのは当然である。よって阮籍の飲酒食肉しても憔悴するという状態は、地すべりのな礼の実践例として、むしろ真情においては痛切な孝心があつたことを示すことになる。つまり、孫盛の解釈からすれば、阮籍は「敗礼傷教」どころか、孝子伝の類に載つてもおかしくない孝心に溢れた人物なのである。

放縦な行為を逆説的な（真の）礼の表出とみる考え方は、次に挙げる例においても表れている。

阮籍母將死、與人圍碁如故。對者求止、籍不肯、留與決賭。既而飲酒三升、舉聲一號、嘔血數升、廢頓久之。

〔世說新語〕任誕篇注所引鄧粲『晉紀』、又見『太平御覽』卷七百四十三、七百五十三

右の文は唐初の『晉書』阮籍伝の文とほぼ重なる。ここでは阮籍が「性至孝」であることの逸話の一つとして挙げられており、この話が阮籍の愛情深さの象徴という意味を持っていたことがわかる。

また野放図な振る舞いにはやむをえない背景があつたのだという同情的な理解も存した。すでに、一で挙げた王隱『晉書』に、「時人或以籍生在魏之交、欲佯狂避時。」という記述があつた。これは東晉において、阮籍の「狂」を切迫した危険な時代状況に逼られてなされた、偽りのものとみる考えがあつたことを示す。王隱は阮籍についてこの見解を否定していたが、孫盛は支持していたらしい。

太尉蔣濟聞而辟之。後爲尚書郎曹爽參軍、以疾歸田里、歲餘爽誅。太傅及大將軍、乃以爲從事中郎。後朝論以其名高、欲顯崇之、籍以世多故、祿仕而已。聞步兵校尉缺、厨多美酒、營人善釀酒、求爲校尉、遂縱酒昏醉、遺落世事。

〔三國志卷〕二十一注所引孫盛『魏氏春秋』

やがて司馬氏に誅される曹爽の參軍となつたが、おそらくは事変を見越して身を引いたため危機を免れたこと、事故が

多いのを警戒して高位に就かなかつたことなど、阮籍の用心深さと慎重さが表現される。特に、歩兵校尉に志願して酒に耽溺し、「世事を遺落した」というのは、阮籍が現実政治と乖離していく過程を意識しているであろう。この認識は齊の藏榮緒『晉書』において、「籍本有濟世志、屬魏晉之際、天下多故、故遂酣飲爲常。」（『文選』卷四十詣蔣公奏記注所引）とはつきり述べられ、更に唐初の『晉書』にもこのまま載せられた。先の阮籍至孝説と併せ、これらの阮籍を超俗であるが故に時代と合わず、現実より精神的に隔絶せざるをえなかつた人物とみる解釈は、十八家の晋史が減んだ今、唐の『晉書』が唯一今に完存する晋の正史であることによって、一番目に触れやすいものとなった。

四 対立の背景

阮籍に関して、正反対の二つの評価が生まれたのは、それぞれの史家が阮籍に対して何かの確証を持っていたとか、奥深く考察した結果とは言い難いものがある。というのは、この対立パターンは、阮籍の延長線上にある放達派士大夫の伝記にもみられるからである。

たとえば喪にあるとき飲酒肉食してしかも大いに憔悴したなどという話は、竹林七士の最後の生き残りである王戎にもある。⁽⁶⁾奇妙で極端な行動を述べるとき、阮籍と同じく自衛の意味での韜晦の一手段とみる解釈も、また王戎の有名な吝嗇話にみられる。⁽⁷⁾これらはいずれも孫盛の『晉陽秋』にあるもので、孫盛が阮籍と王戎とに好意的なのは、どうやら孫盛は竹林名士に対して、みな大体は好感を持っていたと思われる。もっとも、西晋元康期の名士については、手放しで誉めてばかりいる訳ではなく、たとえば王衍に関しては、政務放棄の責任を示すような逸話や、人間の薄情さを指摘するような記述もある。⁽⁸⁾一般に、元康期の名士たちについては、正始や竹林の名士に比して、その軽薄を指摘する傾向

が強い。しかし、それでも全体的には、西晋の名士たちは依然として名士であったことは、『世説新語』を一貫して流れる懐古趣味的な憧憬ひとつにも示されている。とりわけ竹林七士などは、ほとんど偶像化して崇拜された。孫盛の執筆態度は、おそらくこうした魏と西晋の名士たちへの、東晋士大夫の憧れを代表するのであろう。これと対称的なのはやはり王隱で、王隱は阮籍ばかりでなく、王戎や王衍についても、相変わらず感情的な調子で痛罵している。⁽⁹⁾ 干寶や虞預は、風俗の退廃を西晋滅亡と結びつけることで、阮籍攻撃の根拠としたが、これも東晋の草創期に勃興した礼教復帰の気運を代表するものであろう。⁽¹⁰⁾ 放縱の風が未だ根強く支配していた東晋朝廷において、放縱への反発が、晋室再建のための、建前上の礼教復帰の後援を得て、また西晋滅亡という衝撃的事実の促進力を受けて勃興した。⁽¹¹⁾ 西晋滅亡の責任を一番問われたのは元康期の、滅亡に直面した名士たちであって、この風潮は唐の『晋書』にも承継され、王戎伝や王衍伝というのは明らかに阮籍伝とは逆方向で書かれている。つまり、人間性の軽薄さや無責任さをより強調する傾向を持っている。これはひいては藏榮緒『晋書』も、元康名士については西晋滅亡に責任を認める視点をとったからに他ならない。本来阮籍は晉が禪讓を受ける前に死んでしまつて、西晋の滅亡などに関わりないはずであつたが、阮籍が干寶らにとつて非難の対象となる放達士人の崇拜的であつたことから、しかも当時でも文句ない超一流の名士であつたことから、責任の押しつけあいにも巻き込まれる羽目になつたのであろう。

つまり、阮籍評価の違いは、ある程度、東晋における前朝（魏、西晋）の名士たちの、その是非をめぐる議論のパターンではなかつたかと思われるのである。称賛と非難の直接の対象は、元康の風氣とその担い手であつた元康期の名士たちであつたが、その淵源を突き止めようとすると、どうしても当時任達の人として、有名かつ依然として思慕されていた阮籍の存在は看過できなかつたであらう。阮籍否定についていえば、これは何曾の遺恨を王隱や干寶も抱いた、

つまり魏末から続いていた礼法対放達の争いの延長という面もあったし、一番大きかったのは、やはり異民族のために天子が殺され、中原を失って江左に追いやられたことが反対派の背を押す結果になり、名士の阮籍に対して非難の余地ができたのである。

このように東晋においては、名士といえども評価が一時的に不確定になることがあったが、これに対して唐の『晋書』は、よりは是非がはっきりしている。王戎や王衍は一方的に悪役にされたが、阮籍伝では、干寶や王隱らの批判的叙述態度はとられていない。これは阮籍伝における編纂方針を反映するのももちろん、もととなった藏榮緒『晋書』阮籍伝の阮籍観をも示すものである。更に『三國志』王粲伝で、劉宋の裴松之が注に孫盛の『魏氏春秋』を引いたのも、阮籍に關しては孫盛の記述が一番引用に適當であると判断されたからであろう。この時点で、すでに孫盛の解釈が、正当な阮籍理解であったのである。そしてこの宋における阮籍観は、ほぼ東晋での阮籍称賛を受け継ぐとみてよい。つまり、阮籍反対論はうち捨てられたのである。阮籍に対する批判は、依然として竹林名士の風評が高かった六朝では一般受けせず、唐の『晋書』には採用されなかった。やがて六朝時代が全体として否定的に受けとめられるようになる更に後世において、阮籍ら魏晋の名士は礼教破壊という干寶や王隱が主張した観点から、再び悪くいわれることになるのである。

おわりに

東晋時代の晋史における阮籍評価の対立をみてきた。四ではその背景についておおよその推測を述べてみたが、阮籍が後世の人間から好き勝手なことをいわれる一番根本的な要因は、やはり阮籍自身のあいまいさにある。阮籍に關する逸話に共通することは、あくまでその奇矯な行動のみの描写であって、阮籍の心情というものがまったく見えてこない

ことである。放縱の特徴は、客観的な異常性の強調であるが、阮籍の場合には、その上更に不気味さを伴っている。阮籍はただ無感情に異常行動をとるか、極めて了解しがたい意外な反応をみせ、何を考えているのかわからない。しゃべるのは周りの人々、何曾、司馬昭、嵇康、裴楷らであつて、彼らが阮籍の代わりに解釈し弁明する。阮籍自身は自分に關して何も言わないのである。この状況はそのまま東晋の史家たちの間にもあてはまる。「阮籍の常軌を逸した行動」があり、それに史家が注解を加える。

阮籍が、現在における常識のように、悲壯な意識で毎日過ごしていたかどうかは判らないが、嵇康の言葉どおりだんまりを決め込んでいたのは確かなようである。孫盛も『魏氏春秋』で同じことを言っているし、王隱すらも『晉書』のなかで、晋の文帝こと司馬昭が阮籍を「至慎」と評したことを伝えている。⁽¹²⁾よりによって司馬昭から至慎といわれたら阮籍もたまらなかつたであろうが、この徹底した沈黙は、阮籍の確実にとつた行動であり、これこそが、阮籍の意志不在の様々な放縱伝説と、更に東晋における論議が生ずる最大の原因であつたのであろう。

しかし、ここで一つの疑問が残るのは、阮籍が残した作品群からの阮籍理解、たとえば詠懷詩に注を施した顔延之の「説者阮籍在晉文代、常慮過患。故發此詠耳。」といった理解を、阮籍以後の人々がいつごろから持つようになったかということである。阮籍の内面の事情を思いやる孫盛的解釈は、阮籍作品の研究によつてこそ、はじめて実証を伴うのである。阮籍の著作については、「大人先生傳」や、司馬昭のために讓九錫文を書いたことは、ともに東晋の戴逵「竹林七賢論」にみえる。⁽¹⁴⁾しかしたとえば詠懷詩については、齊の臧榮緒『晉書』(『文選』卷二十一顔延之「五君詠」注所引)に、「籍善屬文、初不苦思、率爾便成。作五言詩詠懷八十餘篇、爲世所重。」とはあるものの、肝心の当世の人々が重んじた形跡がはっきりしないのである。よつて、阮籍の作品が、史書の上で阮籍に批判的だつた干寶や王隱に、どう読ま

れたのか見当がつかない。王隱は阮籍の諸作品をみた上で、なおかつ阮籍の韜晦を否定したのであるうか。この問題は、当時の著述の実態についての、更なる考察を必要とするであらう。

阮籍に関する限り、他の放縱派とは違い、割と多くの作品が残ったのは幸運なことであつた。後世の人々は、阮籍の伝記だけではなく、作品も併せ読むことによつて、この人物について多角的に考えることができる。この点、『三國志』が阮籍を文采の士として扱つたのは、陳壽の時には「放縱」という概念がなかつたからというだけではなく、本来正當的な認識だったのかもしれない。よつて、東晋における阮籍の存在が、あくまで札に束縛されない奔放な行動の人という面が強かつたのは、阮籍の自業自得ではあろうが、ある程度歪められた人物像が形成されていた結果といえよう。

注

- (1) 隋書經籍志史部に著録されるものだけでも、以下のように多い。*印をつけたのが東晋に成立したと思われるものである。*晋書八十六卷 本九十三卷。今殘缺。晉著作郎王隱撰。/*晋書二十六卷 本四十四卷。訖明帝。今殘缺。晉散騎常侍虞預撰。/*晋書十卷 未成本十四卷。今殘缺。晉中書郎朱鳳撰。訖元帝。/*晋中興書七十八卷 起東晉。宋湘東太守何法盛撰。/*晋書三十六卷 宋臨川内史謝靈運撰。/*晋書一百一十卷 齊徐州主簿臧榮緒撰。/*晋書十一卷 本一百一卷。梁有。今殘缺。蕭子雲撰。/*晋史卓三十卷 梁蕭子顯撰。/*晋書七卷 鄭忠撰。/*晋書一百一十一卷 沈約撰。/*東晉新書七卷 庾統撰。(以上正史類)/*晋紀四卷 陸機撰。/*晋紀二十三卷 干寶撰。訖愍帝。/*晋紀十卷 晉前軍諮議曹嘉之撰。/*漢晉陽秋四十七卷 訖愍帝。晉榮陽太守習鑿齒撰。/*晋紀十一卷 訖明帝。晉荊州別駕鄧粲撰。/*晋陽秋三十二卷 訖哀帝。孫盛撰。/*晋紀二十三卷 宋中散大夫劉謙之撰。/*晋紀十卷 宋吳興太守王韶之撰。/*晋紀四十五卷 宋中散大夫徐廣撰。/*續晉陽秋二十卷 宋永嘉太守檀鸞撰。/*續晉紀五卷 宋新興太守郭季產撰。(以上古史類)

- (2) 劉知幾『史通』外篇古今正史「皇家貞觀中有詔。以前後晉史十有八家、制作雖多、未能盡善。乃敕史官、更加纂錄。」

(3) 『唐會要』卷六十三史館上篇修前代史「(貞觀)二十年閏三月四日、詔令修史所更撰晉書、(中略)以臧榮緒『晉書』爲本、摭摭諸家及晉代文集。」

(4) 干寶は西晉の風俗を次のように批判的に延べている。「又加之以朝寡純德之士、鄉乏不二之老。風俗淫僻、恥尚失所。學者以莊老爲宗而黜六經、談者以虛薄爲辯而賤名儉、行身者以放濁爲通而狹節信、進仕者以苟得爲貴而鄙居正、當官者以望空爲高而笑勤恪。是以目三公以蕭杌之稱、標上議以虛談之名。劉頌屢言治道、傅咸每糾邪正、皆謂之俗吏。其倚杖虛曠、依阿無心者、皆名重海內。若夫文王日昃不暇食、仲山甫夙夜匪懈者、蓋共嗤點以爲灰塵而相詬病矣。由是毀譽亂於善惡之實、情慝奔於貨慾之塗。選者爲人擇官、官者爲身擇利。而秉鈞當軸之士、身兼官以十數。大極其尊、小録其要、機事之失、十恆八九。而世族貴戚之子弟、陵邁超越、不拘資次。悠悠風塵、皆奔競之士。列官千百、無讓賢之舉。子眞著崇讓而莫之省、子雅制九班而不得用、長虞數直筆而不能糾。其婦女莊櫛織紵、皆取成於婢僕、未嘗知女工絲枲之業、仲饋酒食之事也。先時而婚、任情而動、故皆不恥淫逸之過、不拘妬忌之惡、有逆于舅姑、有反易剛柔、有殺戮妾媵、有黷亂上下。父兄弗之罪也、天下莫之非也。又況責下之聞四教於古、修貞順於今以輔佐君子者哉。禮法刑政、於此大壞。如室斯構而去其鑿契、如水斯積而決其隄防、如火斯蓄而離其薪燎也。國之將亡、本必先顛、其此之謂乎。」

(5) 「性至孝、母終、正與人圍碁、對者求止、籍留與決賭。既而飲酒二斗、舉聲一號、吐血數升。及將葬、食一蒸臠、飲二斗酒、然後臨訣、直言窮矣。舉聲一號、因又吐血數升、毀瘠骨立、殆致滅性。」

(6) 「戎爲豫州刺史、遭母憂。性至孝、不拘禮制、飲酒食肉、或觀棊奕、而容貌毀悴、杖而後起。時汝南和嶠亦名士也。以禮法自持、處大憂、量米而食、然憔悴哀毀、不逮戎也。」(『世說新語』德行篇注所引『晉陽秋』)「世祖及時談、以此貴戎也。」

(7) 「戎多殖財賄、常若不足。或謂戎故以此自晦也。」(『世說新語』儉嗇篇注所引『晉陽秋』)「これだけでは意味がはつきりしないが、次に続く戴逵の論に「王戎晦默於危亂之際、獲免憂禍。既明且哲、於是在矣。或曰、大臣用心、豈其然乎。逵曰、運有險易、時有昏明。如子之言、則蓬瑗、季札之徒、皆負責矣。自古而觀、豈一王戎也哉。」とあり、王戎の吝嗇が自己防衛のための韜晦であったことを示している。」

(8) 「夷甫將爲石勒所殺、謂人曰、吾等若不祖尚浮虛、不至於此。」(『世說新語』輕詆篇注所引『晉陽秋』)「また、王衍の後の運命を暗示する話として次のようなのがみえる。「夷甫父父、有簡諸將免官。夷甫年十七、見所繼從舅羊祜、申陳事狀。」

辭甚俊偉、祐不然之、夷甫拂衣而起。祐顧謂賓客曰、此人必將以盛名處當世大位。然敗俗傷化者、必此人也。」〔世說新語〕識鑒篇注所引〔晉陽秋〕

- (9) 王戎については、「王戎爲左僕射、領吏部尚書。自戎居選、未嘗進一寒素、退一虛名、吏一冤枉、殺一疽嫉。隨其沈浮、門調戶選。」〔初學記〕卷十一所引王隱〔晉書〕や、「王戎代王渾爲司徒、高選長史西曹掾。委任責成。形狀短陋、自目明澈、威儀不足、常乘馬輿。無日不出。以象牙籌畫夜算計家財、遠及田牧、性又至儉、不能善自奉養、飲食通財不外出。天下之人、謂之膏肓之病。」〔初學記〕卷十一、〔藝文類聚〕卷四十七所引王隱〔晉書〕といった文がみえる。また王衍に關しても、「王衍不治經史、唯以莊老虛談惑衆。」〔文選〕卷四十九〔晉紀總論〕注所引王隱〔晉書〕などといったり、王衍が金銭にまったく拘泥しないという説についても、「夷甫求富貴得富貴、資材山積、用不能消、安須問錢乎。而世以不問爲高、不亦惑乎。」と否定する。

- (10) たとえば、中興の主である元帝自身、率先して時務を優先し、礼を遵守することを示した。「上身服儉約、以先時務。(中略)克己復禮、官修其方、而中興之業隆焉。」〔世說新語〕規箴篇注所引鄧粲〔晉紀〕

- (11) 元帝(位三一七〇三二二)の時、後軍將軍の應詹は上書して「元康以來、賤經尚道、以玄虛宏放爲夷達、以儒術清儉爲鄙俗。元嘉之弊、未必不由此也。」といい、大學を立て教義を崇明し、士大夫の子弟や皇室の皇子を教育せよと訴えた(唐〔晉書〕應詹伝、〔文選〕卷四九千寶〔晉紀總論〕注所引劉謙〔晉紀〕)。また「咸和中(成帝治世。三二六〇三三五)、貴遊子弟能談嘲者、慕王平子・謝幼輿等爲達。(下)垂厲色於朝曰、悖禮傷教、罪莫斯甚。中朝傾覆、實由於此。欲奏治之。王導・庾亮不從、乃止。其後皆折節爲名士。」〔世說新語〕賞譽篇注所引鄧粲〔晉書〕という話もあり、東晋における放縱の承継とそれへの反発という状況が窺われる。

- (12) 「籍口不論人過而自然高邁。」〔三國志〕卷二十一王粲伝注所引〔魏氏春秋〕また、「口不論事、自然高邁。」〔世說新語〕德行篇注所引同書

- (13) 「〔司馬文王曰〕然天下之至慎、其惟阮嗣宗乎。每與之言、言及玄遠、而未嘗評論時事、臧否人物。真可謂至慎矣。」吾(李乘)每思此言、亦足以爲明誠。凡人行事、年少立身、不可不慎。勿輕論人、勿輕說事。如此則悔吝何由而生、患禍無從而至矣。」〔三國志〕卷十八李通伝注所引王隱〔晉書〕、又見〔太平御覽〕卷四百三十

- (14) 「魏朝封晉文王、固讓、公卿皆當喻旨。司空鄭冲等馳使從阮籍、求其文。立待之。籍時在袁孝尼家所宿。醉扶而起、書几

板爲文、無所治定。乃寫符信。」（『太平御覽』卷七百一十、『北堂書鈔』卷一百三十三所引『竹林七賢論』）「籍歸著大人先生論。所言皆胸懷間本趣、大意謂先生與己不異也。觀其長嘯相和、亦近乎目擊道存矣。」（『世說新語』樓逸篇注所引『竹林七賢論』）